桜島大根「桜島おごじょ」の空洞症を軽減できる施肥方法

初期窒素施用量を少なくすることで空洞症を軽減し，適期収穫によりす入りを回避

研究開発の背景

・桜島大根は，温暖化の影響や経験豊富な農家の減少などにより，空洞症・す入りの発生が問題になっている。そのため，当センターでは，在来種に比べて空洞症・す入りの発生が少ないF1品種を育成した。
・本品種に適した栽植密度（株間）および施肥方法が不明であった。

研究成果の内容

1 「鹿児島5号」は，基肥窒素を施用せずに追肥主体で行うことで空洞症の発生をほぼ抑えることが可能

※初期（播種から2週間程度）の1株あたりの窒素施用量を少なくすることが空洞症の発生と高い相関がある

①追肥重点の施肥方法（窒素成分施用量）
播種2週間後：追肥1回目（3.5kg/10a）
3週間後：追肥2回目（3.5kg/10a）
約1か月後：追肥3回目（8.0kg/10a）
2か月後以降：追肥4回目（4.4kg/10a）合計19.4kg/10a

②基肥重点の施肥方法（窒素成分施用量）
基肥として19.4kg/10a，50%は緩効性肥料LP100

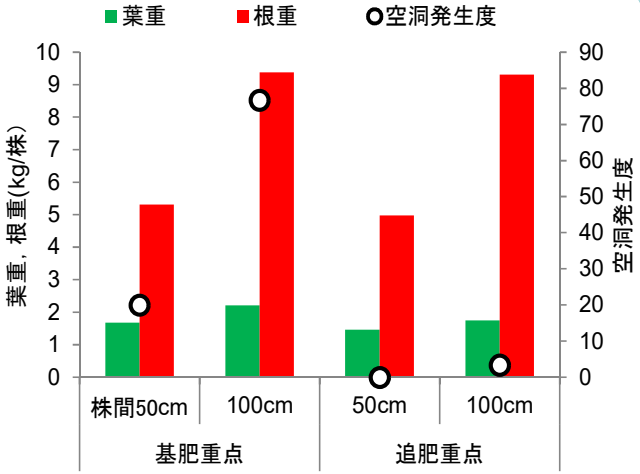

図　施肥方法・株間と葉重，根重，空洞症発生度

2　す入りは適期（1月下旬まで）に一斉収穫することで回避可能

導入メリット

商品率向上

空洞症およびす入りの低減により商品率向上
現行：50%～70%　→　90%

栽培方法の基準化

栽培マニュアルにより栽培技術を統一し安定生産計画出荷へ

期待される効果

・空洞症およびす入りの発生が少なく商品率向上へ。
・栽培方法の基準化により安定生産および計画出荷に寄与。

導入をオススメする対象
桜島地域を中心とした県内の桜島大根栽培農家

鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室